

# 傅山の雑書卷冊の表装形態について考察

聶子柔

はじめに

第一章 傅山の年譜概略

第二章 傅山の雑書卷冊の内容と書体における考察

第三章 表装の形態について

おわりに

はじめに

「雑書卷冊」の特徴は、同じ巻物または冊頁を二種類或いは二種類以上の書体で書き上げることである<sup>1)</sup>。つまり、一人の書家または複数の書家が、一つの巻物または冊頁で二種類以上の書体を使って形成し、内容豊富な物と言われる。巻物という形式は南北朝時代にすでにあり、唐代には発展して洗練された。冊頁という形式の形成は巻物より遅いが、唐代にもすでにあった。当時の巻物や冊頁の内容はほとんど絵または単一の書体を使った書法作品である。元代になると、多くの書体で書かれた巻物や冊頁がだんだん現れてきた。明末清初に、このような多くの書体を混ぜた、創作的な巻冊が再び興って、その中でもっとも代表的な書家は傅山であり、白謙慎氏は

「王鐸より、傅山はもっと多くの書体を書けるので、十七世紀に雑書卷冊を書くもっとも重要な書家になった。傅山は当時誰よりも多くの雑書卷冊を書いただけでなく、雑書卷冊を極点まで発展させた。」<sup>2)</sup>「較之王鐸、傅山能書写更多的字体、他也因此成為十七世紀書写雑書卷冊最重要的書法家。傅山不但書写過比当時任何人更多的雑書卷冊他還將此種書法形式推到极致」<sup>2)</sup>

と評価したことがある。つまり、傅山の七十七年の生涯は、書法作品が非常に多くある。楷書、隸書、草書さらに篆書などの書体の運用に熟達する。もちろん、雑書卷冊に対する造詣も深い。しかし、傅山の雑書卷冊は数多く残っているが、その中に後人により傅山の手稿を集めて表装して、雑書卷冊になることも存在すると思われる。『傅山全書』に収録された作品によると、雑書卷冊が十一点あり、また台湾の何創時基金会が収蔵した「菴廬妙翰卷」もあるので、現存する傅山雑書卷冊の作品は十二点ある。本稿は、傅山の十二点の雑書卷冊に基づいて、雑書卷冊の表装の形態を考察してみたい。

## 第一章 傅山の年譜概略

1606年(万曆三十四年丙午) 1歳

傅山生まれる。初め名は鼎臣、後に山と改める。

1612年(万曆四十年壬子) 7歳

文字の学習を始める。与えられた書物すべてに集中し、一読すれば暗誦することができた。

1614年(万曆四十二年乙卯) 9歳

書を学び、鐘繇を臨書する。

1618年(万曆四十六年戊午) 13歳

明の神宗の「御書海闊五言十字」を見る。

1620年(泰昌元年庚午) 15歳

童子の試験に応じ、山西提学の文翔鳳から博士弟子員に抜擢される。家塾の課業が

厳しく部屋から出られなかったため病にかかり、神僧伝を読み、仏教や道教等諸書を読むようになる。

1625年(天啓五年乙丑) 20歳

府学の試験に合格し、官府から手当金をもらうようになる。しかし、その後八股文を習う必要なしと感じ、十三経、諸子、『史記』から『宋史』に至るまでを読み、仏教道教の書に拡大した。また『文選』を読んだ。

晋唐の楷書を学ぶ。

1627年(天啓七年丁卯) 22歳

「秋海棠賦」を作る。

1628年(崇禎元年戊辰) 23歳

傅山の妻の張氏静君(忻州の人、光禄張泮の娘)が、この一月に子の眉を生む。

1638年(崇禎十一年戊寅) 33歳

「元日雪二首」の詩を作る。

一月、銭文蔚が接待の準備をし、崇善寺に傅山らを招待し遊ぶ。

この年、おいの仁が生まれる。

1641年(崇禎十四年辛巳) 36歳

春、傅山は疫病にかかり危篤状態になったが、兄庚の看護のおかげで回復する。

1644年(崇禎十七年甲申順治元年) 39歳

二月、李自成が太原を攻め落した。傅山は時に平定の嘉山に仮寓した。

三月、李自成が北京を攻め落して、崇禎帝は縊死した。明が滅亡した。

四月、清兵が山海關に入った。

五月三日、清兵が北京に入り、李自成は太原に退却した。

十月、清兵が太原を攻め落した

十一月、山西を悉く平定した。

明が滅んでからは、傅山は学生の服衿を脱ぎ道服を着る。数年後には家を捨て、平定や祁県や汾陽の間を流寓する。この年は、ほとんど平定や寿陽や孟県に仮寓する。

1645年(順治二年乙酉) 40歳

戦乱を避けるため、武郷、汾陽、平定、孟県の間を往来し、蒼岩山に遊ぶ。

1646年(順治三年丙戌) 41歳

六月、袁継威は清に仕えることを拒み殺される。傅山は北京に潜入し、袁継威の遺稿を持ち帰る。

1647—49年(順治四年六年丁亥、戊子、己丑) 42—44歳

「反清復明」の運動に従事した。

一六四九年に、山西全域に反清の義軍が起こった。同年、晋祠の戦役が失敗した。

1650年(順治七年庚寅) 45歳

祁県に寓し、戴楓仲を訪ね、丹楓閣の壁に詩を題す。

陽爾禎の2歳の誕生日を寿ぎ、「長歌寿陽爾禎老友」の詩を作る。

1651年(順治八年辛卯) 46歳

汾陽の陽爾禎の家に寓す。

1653年(順治十年癸巳) 48歳

冬、汾陽から陽曲の土堂村に寓し、荘子の「南華経」を楷書で書き、眉と仁に教えた。

「僑黄」を自号する。

1654年(順治十一年甲午) 49歳

平定に寓する。

謀叛罪で太原郡の獄中に繋がれた。

1655年(順治十二年乙未) 50歳

謀叛罪で太原郡の獄中に繋がれた。

1656年(順治十三年丙申) 51歳

晋陽に寓す。

1657年(順治十四年丁酉) 52歳

家を捨てて北遊し、先ず山東に至る。

1658年(順治十五年戊戌) 53歳

祁県に寓す。

1659年(順治十六年乙亥) 54歳

傅山は南遊し、淮河、揚子江を渡る。

1660年(順治十七年庚子) 55歳

傅山は松莊に隱遁していて、「松僑」を自号する。

傅山の母が卒した。

1664年(康熙三年庚辰) 59歳

目が霞むため読書をやめ、右肘が痛むため筆を持てなくなる。

1674年(康熙十三年甲寅) 69歳

甥の仁が卒する。享年三十七歳。傅山は「哭姪仁六首」を作りその死を弔う。段綽が傅山の門下生となり学書する。

1678年(康熙十七年戊午) 73歳

正月乙未、康熙帝が詔して博学鴻詞科を開く。

給事中の李宗孔と劉沛先が傅山を博学鴻詞科に推薦したが、病と称して辞退する。

1679年(康熙十八年己未) 74歳

傅山に博学鴻詞科の試験を受けさせようとするが同意せず。

1684年(康熙二十三年甲子) 79歳

二月初九日に子の肩が卒する。享年五十七歳。傅山は大いに嘆き、「哭子」の詩十

四章を作った。

遺書を魏象枢、李振藻、孫長公、戴夢熊に遺し、両孫を託する。

六月十二日、傅山が卒する。享年七十九歳。

## 第二章 傅山の雑書卷冊の内容と書体における考察

傅山は明末清初に、多くの雑書卷冊を書いて、雑書卷冊という形式を極地まで発展させた代表的な書家である。現存する傅山の作品は多いが、偽物も多くあるの

された十一(①)～(⑩)の雑書卷冊と台湾の何創時基金会が収蔵している「番廬妙翰卷」(⑪)を考察する。

### ①「篆楷草詩文手卷」(図一)

紙本。縦三〇・三センチメートル、横二六九・五センチメートル。晋祠博物館蔵

内容によって、三つの部分に分けられる。

(1) 第一部分は傅山の自作の詩である。大篆で書かれた。全体は金石の雰囲気があり、傅山が金石に造詣が深いとわかる。隔水までの内容を第一段にして、後ろは第二段にした。一段目の最後「伝書豈肯降、含(以下欠)」、「含」のあとが欠けていて、内容は不完全である。二段目の大篆の右側に、朱墨で釈文を書いたが、内容も不完全で、「春邨多柳陰」後の内容は欠けている。また、第一段と第二段の紙の色が違う。

(2) 第二部分の第一段は「六祖法宝壇經」中の内容である。小楷で書かれた。

第二段は「六祖法宝壇經」中の偈語である。

(3) 第三部分は自作の詩「除和于」、「和秀」、「和昭」である。草書で書かれて、

前の部分は後ろより連綿性が強くて、重さも表した。

この雑書卷冊の第一部分内容は不完全で、紙の色も違う。第三部分の内容は欠けなかったが、最後まで落款がなかった。頭に、引首もなかった。この雑書卷冊は、

傅山のいろいろな作品から裁ち切ったあと、整理して表装したものと疑っている。

### ②「隸草零散手稿冊頁」(図二)

紙本。縦二七・五センチメートル、横十二・二センチメートル。山西博物院蔵

内容によって、十一の部分に分けられる。

(1) 第一部分内容はまとまりがない、ばらばらである。隸書で書かれたが、最初の一段は「蔡邕郭有道碑」という題名を書いた、第二、第三段の内容は「蔡邕郭有道碑」と関係がない。郝継文氏の論文「傅山の隸書に関する論」<sup>5)</sup>「傅山隸書略論」(7)では、最後の一段は「張遷碑」の臨書と判定した。

(2) 第二部分の内容は自作詩と、杜甫の詩「寄高三十五書記」中の「嘆息高生老、新詩日又多。美名人不及、佳句法如何。」と「贈鄭十八賁」中の「温温士君子、令我懷抱尽。」を書き取ったものである。第一段は一字一字はつきりした行書で書かれて、第二段は行草書で書かれた。

(3) 第三部分の内容は『世説新語・輕詆第二十六』の一節の昔話である。草書で書かれた。

(4) 第四部分の内容は筆記であり、特別の意味はない。第三部分と同じで草書で書かれて、第一段は三行で、第二、第三段は二行で書いた。注目すべきは、第一段の部分は傳山の生活の筆記かもしれないが、「管子愛秋雲、多想極材居。無事喫薄粥、後看南華(後は欠く)」「南華」のあとが欠け、内容は不完全である。あと第二段の部分はまたほかの内容であり、第一段と関係がない。そして、この作品の第四部分、第六部分、第七部分、第十部分、第十一部分は明らかに紙を貼りあわせた跡がある。各部分の前後関係もない。第十部分の第一段の「憐」という字の左側は、「憐」の形に合わせて裁ち切ることが見える。また、第七部分は傳山が王羲之の「昨書帖」と「月半哀悼帖」を臨書したが、「昨書帖」は前の二行だけ、内容は欠けて不完全であり、三行目からは「月半哀悼帖」の臨書である。これから見ると、この雑書巻冊は、傳山のいろいろな作品や手稿から裁ち切ったあと、整理して表装したかもしれない。

(5) 第五部分の最初の五字は意味が不明である。後ろの三行は医学に関する著作『難經・第二十難』である。全て章草で書かれた。

(6) 第六部分の内容は庾信の詩、「擬詠懷詩二十七首」中の三首の中からそれぞれ一文を書き取った。一つ目は「擬詠懷詩・五」の「一朝人事尽、身名不足親。」、二つ目は「擬詠懷詩・十四」の「有情何可豁、忘懷固難遣。」、三つ目は「擬詠懷詩・十八」の「樂天乃知命、何時能不憂」である。行草書で書かれた。

(7) 第七部分の内容は王羲之の「昨書帖」と「月半哀悼帖」の臨書である。前の二行目までは「昨書帖」であるが、内容がかけて、不完全の臨書であり、後ろの三行は「月半哀悼帖」の全ての内容を臨書したものである。行草書で書かれた。最後

は「山印」という印を押した。

(8) 第八部分の内容は第六部分の内容と同じで、庾信の詩を書き取った。一つ目は「擬詠懷詩・十九」中の「天下有情人、居然性靈妖。」で、二つ目は「擬詠懷詩・二十」中の「古人持此性、遂有不能安。」で、三つ目は「擬詠懷詩・二十四」中の「無悶無不悶、有待何可待。」で、三つの文句を書き取った。行草書で書かれて、「山印」という印を押した。

(9) 第九部分の内容は傳山の筆記「極知言語病、三臧每自銘。忽然不可忍、便亦氣難平。即此安未快、不可言知移。長移貧子受用。」である。草書で書かれて、「傳山之印」という印を押した。

(10) 第十部分の内容は第六部分、第八部分と同じで、庾信の詩を書き取った。一つ目は「擬詠懷詩・二十五」中の「自知費天下、也復何足言。」で、二つ目は「擬詠懷詩・十二」中の「天道或可問、微兮不忍言。」で、三つ目は「擬詠懷詩・三」中の「自憐才智盡、空傷年鬢秋。」で、四つ目は「慨然成咏詩」中の「寶雞雖有祀、何時能更鳴。」で、四つの文句を書き取った。草書で書かれて、「傳山之印」という印を押した。

(11) 第十一部分の内容は『世説新語・品藻』中の、庾道季の精神に関する視点と傳山の感想である。前の五行までは行楷書で書かれて、最後の三行は行書で書かれて、「傳山之印」という印を押した。

### ③ 「楷行草道經仏經冊頁」(四三)

紙本。縦二十五・二センチメートル、横十四センチメートル。上海博物館蔵。内容によって二つの部分に分けられる。

(1) 第一部分の内容は道教の經典『太上老君開天經』(雲笈二卷)の一段である。十二行目の「西之大澤」の後の内容が欠けて、十三行目の「此期未克」の前の内容が欠けた。つまり、『太上老君開天經』(雲笈二卷)の一部分の内容が欠けた。行書で書かれて、最後は行楷書で書かれた。

(2) 第二部分の内容は仏教の經典『仏説大安般守意經序』と傳山の筆記である。

小楷と草書で書かれた。この部分は多くの蔵印を押して、全篇が統一して、最後に落款もあるので、傳山のほかの作品から切り取って表装することではないと判定できる。

#### ④「楷行草篆歷代名臣俊賞」(冊頁)(図四)

紙本。縦二十四・六センチメートル、横二十一・二センチメートル。山西博物院蔵。

「歷代名臣」という引首がある。十三部分に分けられる。

第一部分は「王羲之」を紹介して、行楷書で書かれた。第二部分は陶淵明を紹介して、行楷書で書かれた。第三部分は白居易を紹介して、行書で書かれた。第四部分は王通を紹介して、楷書で書かれた。第五部分は魏徵を紹介して、行草書で書かれた。第六部分は杜如晦を紹介して、行草書で書かれた。第七部分は房玄齡を紹介して、行楷書で書かれた。第八部分は李靖を紹介して、行楷書で書かれた。第九部分は狄仁傑を紹介して、楷書で書かれた。第十部分は陸贄を紹介して、行草書で書かれた。十一部分は韓愈を紹介して、行楷書で書かれた。第十二部分は裴度を紹介して、篆書と行草書で書かれた。この作品全篇が統一して、引首もある。最後に蔵印を押した。

#### ⑤「楷隸草篆詩文冊頁」(図五)

紙本。縦三一センチメートル、横十七・三センチメートル。晋祠博物館蔵。

内容によって、四つの部分に分けられる。

(1) 第一部分の内容は傳山の友達の梁檀に対する評価である。楷書で書かれた。この部分の最後に、「儒黃之人」という落款があった。

(2) 第二部分の内容は祖鴻勛の文章「与陽休之書」を書き取ったものである。隸書で書かれた。最後に「傳山之印」を押した。

(3) 第三部分の内容は傳山が傅眉、傅仁に勧学することである。草草書で書かれた。

(4) 第四部分の内容は唐の杜甫の詩「謁真諦寺禪師」と「入宅」である。篆書で書かれて、古文字の結構を用いた。この部分の最後に、「真山書松橋」という落款があり、「傳山之印」も押された。

この雑書巻冊は四つの部分があり、各部分には同じ「傳山之印」を押した。第一、第二、第四部分には落款があった。各部分の内容も完整で、ほかの作品から切り取った跡がないので、傳山の手稿を寄せ集めて作った雑書巻冊ではないと判明する。

#### ⑥「篆隸行草楷雜記冊頁」(図六)

紙本。縦二六・五センチメートル、横一九センチメートル。天津芸術博物館蔵。内容によって、三つの部分に分けられる。

(1) 第一部分の内容は『禮記・樂記』の一段、『莊子・達生』の一段と『列子・天瑞』の一段を書き取った。篆書と楷書で書かれた。

(2) 第二部分の内容は、傳山の仏教の精進に関する考えである。隸書、篆書、楷書と行楷書で書かれた。

(3) 第三部分の内容は『列子・楊朱』の一段を書き取ったものである。楷書と隸書で書かれた。この部分の最後に「傳山印」を押した。

この三つの部分の内容は全て完全で、最後は傳山の印を押した。ほかの作品から切り取った跡がないので、傳山の手稿を寄せ集めて作った雑書巻冊ではないと判明する。

#### ⑦「楷隸草鵬冠子等雜記冊頁」(図七)

紙本。縦二五センチメートル、横二一・九センチメートル。蘇州市博物館蔵。

(1) 第一部分の内容は『鵬冠子・世兵』の一段を書き取ったものである。題名を篆書で書いた、正文は小楷書で書かれた。

(2) 第二部分の内容は潘岳の文章「射雉賦」の一段を書き取ったものである。第一部分の小楷書より小さい小楷書で書かれた。

(3) 第三部分の内容は『難經・第六十六難』を書き取ったものである。小楷書で



書かれた。第一部分から第三部分までの紙は全て縦罫線があり、書いた内容も完全で、第三部分の最後には印も押したので、第一部分から第三部分までの内容は同じ時期に書かれたものではなくである。

(4) 第四部分の内容は「狼子野心」の引用と『大戴礼記』第二卷の「夏小正」を書き取ったものである。小楷書で書かれた。この部分の最後には「太原」と「傅山之印」という印を押しした。

(5) 第五部分の内容は『安世房中歌』を書き取ったものである。隸書と草書で書かれた。また、隙間に「虜」と「慮」二字を小楷書で注釈した。これから見ると、傅山の日常的な手稿で、真剣な作品ではない。

(6) 第六部分の内容は東漢の班固の文章「奕旨」を書き取ったものである。章草書で書かれた。この部分の最後には傅山の落款があり、「傅山之印」という印も押しした。

#### ⑧ 「小楷王維詩草書李白塞下曲手卷」(図八)

紙本。縦二四・五センチメートル、横一〇四センチメートル。故宮博物院蔵。

(1) 第一部分の内容は王維の詩「納涼」、「飯覆釜山僧」、「自大散以往深林密竹磴道盤曲四五十里至黃牛」、「春中田園作」、「送別」、「齊州送祖三」、「早朝」と筆記である。楷書で書かれて、筆記の部分は草書で書かれた。この部分の最後には「山記」という落款があり、「傅山印」という印も押しした。

(2) 第二部分の内容は李白の詩「塞下曲」と筆記である。第一部分の筆記より大きな草書で書かれた。最後には「山」という落款があり、「傅山印」という印を押しした。

#### ⑨ 「行楷雜記詩詞冊頁」(図九)

紙本。縦二六・三センチメートル、横一五・五センチメートル。蘇州市博物館蔵。

(1) 第一部分の内容は傅山の古詩に対する評価である。小楷書と行楷書で書か

れた。この部分の最後には「傅山之印」という印を押しした。

(2) 第二部分の内容は傅山が友達朱霞のために作った詩である。行草書で書かれたが、筆記部分の字体は正文より少し小さい。この部分の最後に「甲申十二月初七日、書於仇猶客舍」という落款がある。落款から見ると、傅山は甲申年(1644年)十二月初七日にこの部分を書いた。

(3) 第三部分の内容は傅山の自作詩である。小楷書、行楷書と行草書で書かれた。

#### ⑩ 「行楷古人詩文冊頁」(図十)

紙本。縦二七・七センチメートル、横一五・三センチメートル。山西博物院蔵。

(1) 第一部分の内容は『史記・遊俠列伝・劇孟伝』である。行草書で書かれた。

(2) 第二部分の内容は杜甫の詩「瀼西寒望」、「不離西閣」、「入宅二首」と、陶淵明の「庚戌歲九月中於西田獲早稻」、「有會而作」を書き取ったものである。行書、行草書、草書、楷書で書かれた。この部分の最後には「真山」という落款があり、「傅山印」という印も押しされた。

#### ⑪ 「行書鍾靜人猶寢雜記冊頁」(図十一)

紙本。縦二七センチメートル、横一五センチメートル。晋祠博物館蔵。

(1) 第一部分の内容は唐代詩人劉郇伯の詩「早行」と傅山の筆記である。行書と行草書で書かれた。

(2) 第二部分の内容は『旧唐書・蕭仿伝』を書き取ったものである。行草書と小楷書で書かれた。

(3) 第三部分の内容は、杜甫の「月夜」と唐末の譚用之の詩「再游韋曲山寺」を書き取ったものである。行草書、楷書と草書で書かれた。

(4) 第四部分の内容は東漢蓋助のことを書き取ったものである。行草書で書かれた。

(5) 第五部分の内容は『世說新語・德行下』を書き取ったものである。小楷書、

行草書と楷書で書かれた。

この作品は落款と印がなくて、内容も統一してない。後人が傳山の手稿を集めて表装した巻冊であろう。

## ⑫「畜廬妙翰卷」(図十一)

紙本。縦二十九センチメートル、横五七三センチメートル。何創時書法芸術基金會蔵。

「畜廬妙翰卷」は内容によって、七つの部分に分けられる。第五部分を考察すると、この作品は1651年と1652年の二年間で完成したことがわかる。

(1) 第一部分、内容は筆記である。第一段は楷書を主に、ある字は篆書の結構を用いた。

(2) 第二部分、内容は『莊子・外篇十二・天地』の一段と傳山の注釈である。楷書、草書、篆書と隷書を交えて書かれたものである。

(3) 第三部分、内容は処方箋である。これから見ると、傳山は医学に造詣が深かった。楷書で書かれた。

(4) 第四部分の内容も『莊子・外篇十二・天地』の一段を書き取ったものである。前の部分は草書で書かれ、真ん中の部分は篆書と隷書を混ぜて書かれた。後ろの部分は行草書と小行楷で書かれた。

(5) 第五部分、内容は『莊子・外篇十四・天運』の一段である。この部分は、「畜廬妙翰卷」のもっとも長い部分であり、そのなかには五節の筆記がある。最も重要な筆記は一つ目の筆記である。この部分の前の一段は行草書で書かれて、そのあとは行書を主に数多くの異体字で書かれた。また、最初は隷書で「南華天運」という題を書いた。

一つ目筆記の原文は「楊五哥、七哥持此卷子要書。村僑无笔久矣。秃穎老擊、尽者結構。」で、大体の意味は「楊五兄、七兄は私のところにこの卷子を持ってきて、作品を書くように頼んだ。村僑は長い間書かなかったが、秃筆で老いた腕で、結構を尽くした。」である。

こちらの「村僑」は傳山の別号である。清の順治十年(1653年)、傳山は山西陽曲の黄花山に住んでいて、「僑黄」と自号し、同十七年(1660年)ぐらいに、傳山は松莊に隠遁し、「松僑」と自号する。「僑」は海外あるいは異郷に住むという意味である。これから見ると、傳山が「僑」という字のついた号を用いたのは、すべて明朝が滅亡したあとのことである<sup>6)</sup>。すなわち、明朝が滅亡したあと、自分はまだ国と家を失ったことを示す。この筆記から見ると、傳山は「村僑」を自号するから、この雑書巻冊は明朝が滅亡したあとに書かれた物と推定でき、すなわち一六四四年、傳山の三十九歳以降に書かれたものである。さらに、「丹崖の雨の中に、老親は餛飩を作つて、(傳)山が食べた。」という筆記から見ると、傳山の母は当時生きていた。1660年傳山の母が卒したので、この作品の完成した時期は1644年〜1660年の間に推定できる。

1644年〜1645年、傳山は戦乱を避けるため、武郷、汾陽、平定、孟県の間を往来していた、1646年〜1649年、傳山は「反清復明」の運動に従事した。1649年、晋祠の戦役が失敗したあとの1650年、傳山は祁県に仮寓した。1651年と1652年、傳山は汾陽の楊維禎の家に仮寓し、1653年傳山は汾陽から離れて陽曲土堂村に仮寓した。1654年から1655年まで、傳山四十九歳と五十歳のとき、謀叛罪で太原の獄舎にいたので、この巻冊を書く条件に合わない。1656年晋陽に仮寓し、1657年に家を捨てて北遊した。1658年、陽曲に仮寓した。1659年からは、南遊した。1660年、傳山の母が卒した。

上記の1644年〜1660年の傳山の活動から見ると、「畜廬妙翰」を書く最も適切な期間は1651年と1652年である。この二年の間に、傳山はちょうど汾陽の楊爾禎の家に仮寓し、傳山の筆記の中で述べられた「楊五兄と七兄」は友達楊爾禎の二人の弟である。また、この巻冊の第二部分の筆記では、「山佳(傳山)は四五十歳の男である。」(「山佳四五十歳老大漢」と述べられ、傳山は当時四五十歳と判明し、傳山は1606年<sup>7)</sup>に生まれたので、1651年と1652年はちょうど四五十歳の期間である<sup>8)</sup>。

これから、「畜廬妙翰卷」は1651年から1652年までの間、すなわち傳山

四十六歳と四十七歳のとき、書かれたものと推定できる。さらに、この巻冊の内容によって、この作品は一気に書き上げられたものではなく、長い間に次々と書き上げられたものであることがわかる。

この部分の最初の筆記「楊五兄、七兄は私にこの卷子に作品を書かせる。」（「楊五哥、七哥持此卷子要書。」）から見ると、第五部分の終わりまでは、傅山は日常的なことを自由に書くことが目的であった。そのため、書く内容は「莊子」などの文章を抜き書き、筆記、注釈または日記などである。内容は極めて自在さがある。しかしながら、第六部分からは、楊氏のために書かれた作品と言える。内容は『莊子』を主に、傅山自身の理解と注釈を加えて、または、自身の書画に関する観点の筆記もある。最初のところに、「南華天運」という題があり、より作品の正式感があり、書く内容もより正式で、形式の上でも、前よりもっと調和していて、統一感がある。書体の使い方では、種類はもともと豊かである。小楷、行書、草書、隸書、大篆などを交互にする。総じて言えば、第五部分から、『齋廬妙翰卷』はもともと作品の形で書かれているようである。

(6) 第六部分、内容は『莊子・外篇十三・天道』の一段である。この部分は、使われた書体の数が一番多いところである。小楷、楷書、行楷、隸書、大篆、草書で書かれた。

(7) 第七部分、内容は傅山による『莊子・内篇』と『莊子・外篇』に関する論点である。楷書で書かれて、最後は「僑黃真山」の印を押した。

### 第三章 表装の形態について

次に、傅山の十二件の雑書巻冊の形態と落款、傅山の印、収蔵印の有無などによって、表一を作った。

表一

作品	形態	落款	傅山の印	収蔵印	後人の表装
「篆楷草詩文手巻」	手巻				○
「隸草零散手稿冊頁」	冊頁		○		○
「楷行草道經仏經冊頁」	冊頁	○		○	
「楷行草篆歴代名臣像贊」	冊頁			○	
「楷隸草篆詩文冊頁」	冊頁	○	○		
「篆隸行草楷雜記冊頁」	冊頁		○		○
「楷隸草鷓冠子等雜記冊頁」	冊頁	○	○		
「小楷王維詩草書李白塞下曲手巻」	手巻	○	○	○	
「行楷雜記詩詞冊頁」	冊頁	○	○		
「行楷古人詩文冊頁」	冊頁	○	○	○	
「行書鍾靜人猶寢雜記冊頁」	冊頁				○
「齋廬妙翰巻」	手巻		○	○	



表一から見ると、十二件の雑書巻冊の中には、冊頁が九件あり、手巻が三件ある。明以降の手巻の最大の特徴は本紙の前に一段の「引首」を加えることであるが、「篆楷草詩文手巻」、「小楷王維詩草書李白塞下曲手巻」、「喬廬妙翰卷」には全て引首がない。しかし、「喬廬妙翰卷」の第五部分は楊氏兄弟のために書くので、「南華天運」と題した。それから見ると、傳山は完全な手巻という形式を書き上げる意識がなく、ただ日常的な書写の時は、手巻の引首がないが、他人のために書いて、作品を創作する意識を持つときは、題を付ける。「小楷王維詩草書李白塞下曲手巻」も引首がないが、全体の内容は完全で、使用の紙もつなぎ跡がなく、落款と傳山の印もある。作品の完全性を守るために、手巻として表装したかもしれない。しかし、「篆楷草詩文手巻」は引首、落款、傳山の印と収蔵印が全てなくて、撞辺式（図十三）で表装した。使用の紙の色と大きさもそれぞれ違う。第一部分の第一段と第三部分に使った紙はつなぎ跡がなく、長い紙であり、内容も完全である。手巻の全体から見ると、作品の真ん中に、二枚の短い作品があり、一つは篆書作品であり、各字の右側に朱墨で釈文を書いた。もう一つは小楷書の作品で、作品の全体は豊富である。また、この作品の表装の全体構造は見返し、隔水、長い作品、隔水、短い作品、隔水、短い作品、隔水、長い作品、隔水、短い作品、隔水、長い作品、隔水、拖尾紙である。しかし、一般的に、清代の撞辺式手巻の構造は見返し、隔水、引首、隔水、本紙、隔水、拖尾紙である。この作品の表装形式は宋代の卷子の形式に近い。以上からみると、「篆楷草詩文手巻」は傳山のいろいろな作品や手巻を集めたあと、保存と収蔵の目的のために、整理して表装したものかもしれない。長い手巻を完全に残すためと第一部分の第二段と第二部分の短い手巻を入れて、内容を豊富にするために、手巻として表装した。

また、金運昌の文章「定遠齋旧藏傳山雜書卷冊小記」には、張學良が収蔵した傳山の「各体書冊」が述べられた。「各体書冊」も傳山の一件の雑書巻冊作品であり、落款がなく、最後のところに「傳山之印」を押した。金運昌は、「各体書冊」は傳山が一気に書き上げた作品ではなくて、最後の印は傳山の家族がこの作品の信頼性を高めるために押したものであると論述した。これからみると、傳山のある雑

書巻冊は確かに後人あるいは傳山の家族が傳山のいろいろな手巻を集めて表装したものであり、印も後人が押した。「篆隸行草楷雜記冊頁」は落款と収蔵印がなく、「傳山印」を一つしか押さなかった。三つの内容は何の関係もない。そのため、「篆隸行草楷雜記冊頁」も後人が表装した雑書巻冊であろう。

九件の冊頁の中で、「行書鍾靜人猶寢雜記冊頁」は落款、傳山の印と収蔵印が全てない。「楷行草篆歷代名臣像贊」は落款と傳山の印がないが、扉に「歷代名臣」と題した。この作品は甲申事変の後、傳山が歴史上の名臣を題材として、亡国の痛みと忠臣良将への景仰を表したものである。忠臣の画像があり、その後は讃詞と忠臣の事跡を書いたものである。明らかな創作意図があるので、落款と傳山の印がないが、完全な作品である。いろいろな作品を集めて、表装した作品ではない。しかし、「行書鍾靜人猶寢雜記冊頁」の内容は古人詩文、小説、史書の抄録と筆記、感想など、いろいろある。字もあまり真剣ではなくて、落款、傳山の印と収蔵印が全てない。これから見ると、「行書鍾靜人猶寢雜記冊頁」は傳山のいろいろな手巻を集めたあと、表装したものである。

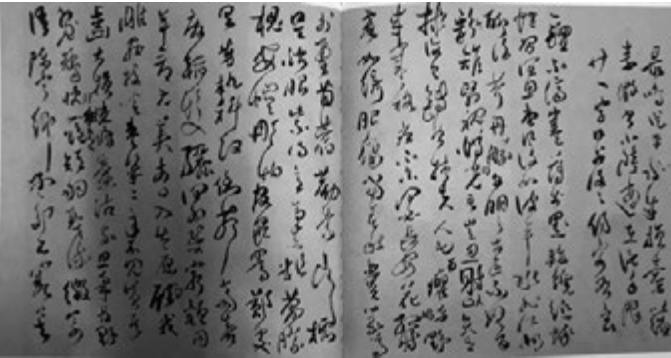
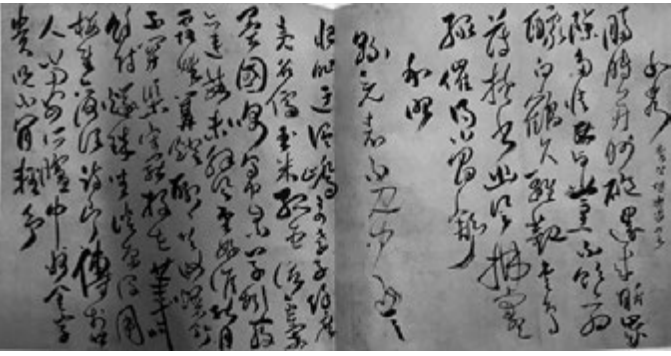
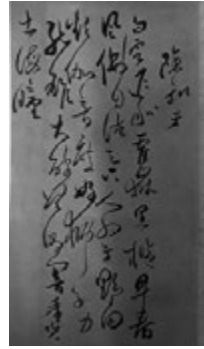
また、「隸草零散手稿冊頁」では傳山の印を押したが、第四部分の第一段の後ろ（「管子愛秋雲、多想極材居。無事喫薄粥、後看南華（後は欠く）」）「南華」のあとが欠け、内容は不完全である。あとの第二段の部分はまたほかの内容であり、第一段と関係がない。そして、この作品の第四部分、第六部分、第七部分、第十部分、第十一部分は明らかに紙を貼りあわせた跡がある。第十一部分の第一段の「憐」という字の左側は、「憐」の形に合わせて裁ち切ったことが見える。また、第七部分は傳山が王羲之の「昨書帖」と「月半哀悼帖」を臨書したが、「昨書帖」は前の二行だけ、内容は欠けて不完全であり、三行目からは「月半哀悼帖」の臨書である。これから見ると、この「隸草零散手稿冊頁」は、傳山のいろいろな作品や手巻から裁ち切ったあと、整理して表装したものである。



第二部分

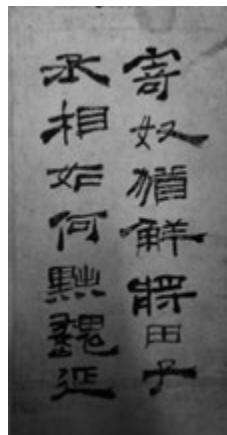
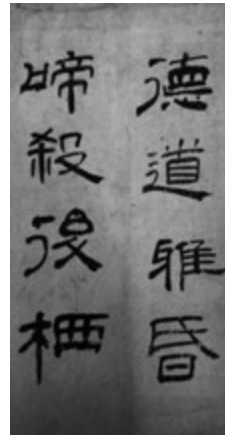
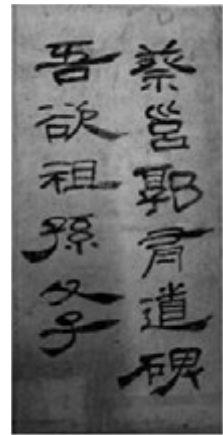


第三部分

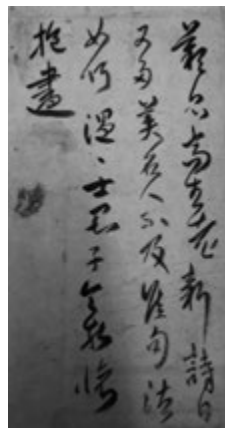
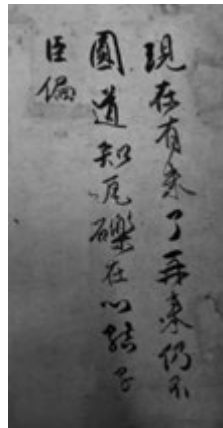


图二 「隸草零散手稿冊頁」 10

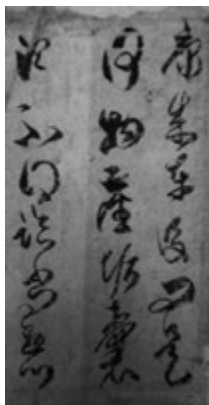
第一部分



第二部分

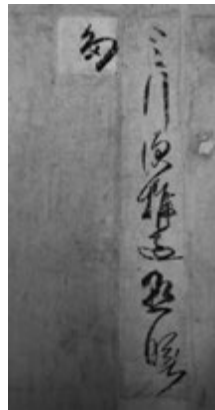
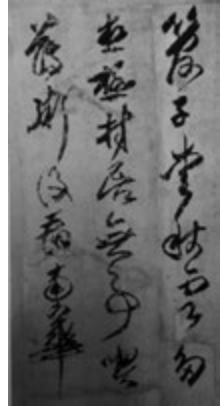


第三部分

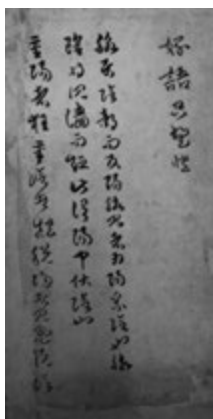




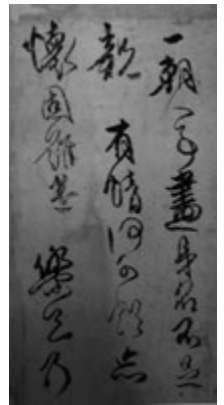
第四部分



第五部分



第六部分

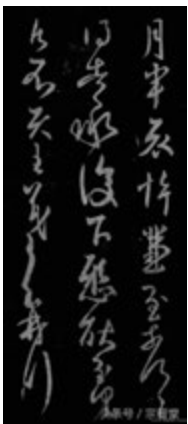


第七部分 傅山の臨書

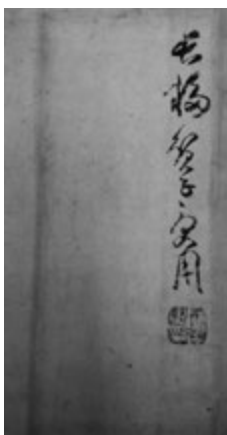
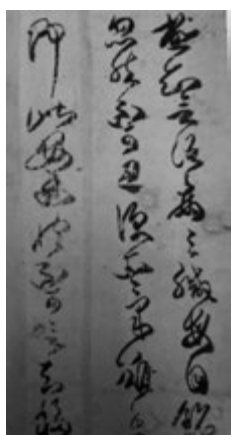
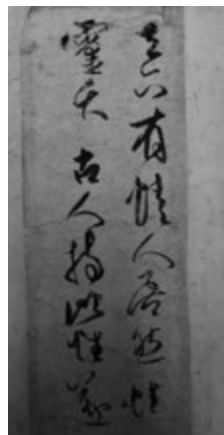
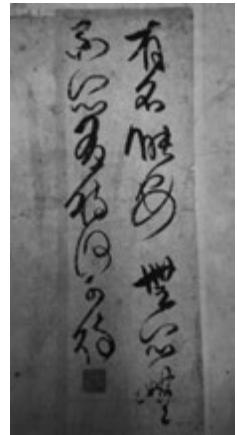
第八部分



王羲之の拓本



第九部分



自... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

第十一部分

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...

... 也... 河...  
... 也... 河...  
... 也... 河...



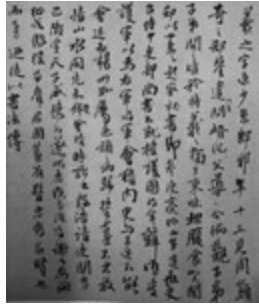
圖四「楷行草篆歷代名臣像贊」

10

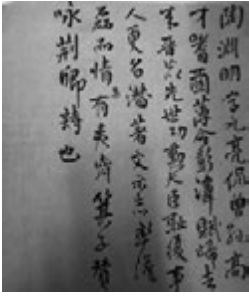
第一部分



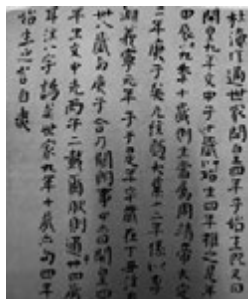
第三部分



第二部分



第四部分



第五部分



第六部分



第七部分









第二部分

地王或視三明底既暗冥得天智明  
目田情勤於習樂躬履各事正不  
休也所改也

遺教經大之者制之一處無事  
不解南無心王甚苦計陸  
開果備無日月量區胡不陸

若謂子到子到子到者成到子到  
虛者無實者虛也到到到其苦也  
莫少都莫少虛都也虛也其居  
受取地也夫其而其事之破碼而  
後其有舞仁義者其能後也四運  
轉無已天地密移時變之在  
區至厥際習田情運

若能精勤勉志不散則  
休息煩惱不久而此世苦  
提大集月懺往語  
一行三昧者應空空周攝  
諸亂志如之安恒志念

一佛念如鏡如石悔是推一  
念中即能見十方諸佛獲  
大而身也  
佛語聖賢彌彌發意光此出背  
三十二劫改於昇沒地發是  
意即大積進飽九劫得于聖  
上正鼻之術

第三部分

衛端木叔者子貢之世也藉其  
先資家累甚萬金不治世故放意  
所為其生民之所詠為人意之所  
詠玩者無不為也無不玩也揚屋  
臺榭園圃池沼飲食車服聲  
樂瑣御擬齊楚之君焉至其  
情所欲好耳所欲聽目所欲視  
口所欲嘗雖殊方偏國非齊土  
之所產者無不致之猶蓬  
藪之物也

之冊唯慕言安社  
稷之勳

第一部分

圖七「楷隸草鸚冠子等雜記冊頁」

道有是數故神明可文之物有相勝水火可用也東南故  
形不可信也五帝在前三王在後上德三乘兵其俱起首帝  
百戰至七十二代有唐而後有若夫大變其常地不易  
其則陰陽不亂其數生死不促其位三光不改其用神明  
不使其法得支不兩張成敗不兩立不謂替日月者古今一  
君子不情與人不能無見又自其則運福之伊伊酒伴  
人心者乎管子作策百里至官以海內家亂立為一印並

不天地善謀日月不慈地成四時轉管家中神執慎能之章  
成其用先如其故湯能以七十里收其成五百里代時如不  
燭十方萬曲可雜齊同勝道不不知者計全明得不信時  
而棄利勇士不性死和冰名欲輸立德之美者其慮不  
與仙同欲論九天之高者行不控請是也忠在不先其身  
而後其忠寒心孤立命應將軍對戰則國恩民服城中  
則食人的散計夫其國則主因為天下父特圖計者不  
以無詳于國有過計有言欲是以曹沐為君得此奔

三戰而心地千里使曹子計不顧後制頭而能則不是為  
敗軍擒將曹子為敗軍擒將非勇也圖則名欲  
此智也身死名存非忠也夫死人之事者不能情人之憂  
故進與曹者計相合指展曹子以一劍之初初相  
公擇位之相邑不變辭氣不恃三戰之所也  
是為及天下震動口能驚駭名傳後世杖杖於以  
魂者大功不成故曹子去念慎之心立於身之功  
素知忠之魂立累世之名故曹子為知時者名高

知人制身為能將與越戰軍敗則身自到越天  
五城自服以為禍門身死以危其名名實俱滅是  
謂夫此不還人之計也非過才之計也夫得道者  
得無失凡人者存有心善不善情多惡故多惡則  
不不則多難多難則酒酒則無如多飲則  
不博不博則多憂多憂則酒酒則無如多飲者  
口之字各已大強不能時是則事能能而過王不知  
大之極與神同方類生成用一不窮明者為法機  
道是行齊過道是參之天地出實逐金將破  
軍發如鐵尖

少獨不見大開開才為倚之則婦人揚之什如種  
之則不擇性而能舉其中者操其法則能選士不  
能絕也關四年而輕重異之者執使之然也

第二部分

皇明湯侯休養嘉承天  
和伊樂麻福丸樂不荒惟  
之即後即師德下臣感德  
命聞江舊孔之翼

第三部分

九國一帝本帝之明下民之樂  
子孫孫光平晴溫良受帝之  
嘉應命去壽牙不也  
身奉以信修多所多雲

第四部分

皇明湯侯休養嘉承天  
和伊樂麻福丸樂不荒惟  
之即後即師德下臣感德  
命聞江舊孔之翼

第五部分

皇明湯侯休養嘉承天  
和伊樂麻福丸樂不荒惟  
之即後即師德下臣感德  
命聞江舊孔之翼

皇明湯侯休養嘉承天  
和伊樂麻福丸樂不荒惟  
之即後即師德下臣感德  
命聞江舊孔之翼

圖八「小楷王維詩草書李白塞下曲手卷」 10

第一部分

勢木萬餘林清法貫其中前臨大江。雲連木末風  
連漪。涌白沙素。銷如遊空。假臥盤石上。翻濤沃微  
躬。激流復濯。之前對。助魚翁。貧餓。凡幾。許往。思遠  
葉東

晚知清淨理。日與人群疎。將候遠山僧。先期掃藥廬。  
米從雲峰粟。願成蓮萼居。藉草飯松屑。焚香  
看道書。然燈盡欲盡。鳴磬夜方初。一悟寂為樂。此  
生間有餘。思歸何必深。身世散空虛。

危徑幾萬轉。數里折三休。迴環見徒侶。隱映隔  
林丘。颯。松上雨。濕中石。中流靜。深澗寒。長浦高  
山頭。望見南山陽。白露蒨蒨。青翠歷歷。綠絲樹如  
鬢。浮曾是。藏茶密。曠脫銷人憂。

屋上春鳩鳴村邊杏花白。持斧伐遠揚。荷鋤現菜脈。歸燕  
磯。跡。巢。舊。人。看。新。屠。臨。鴈。足。不。御。州。快。送。行。客。北

下馬飲石面。問君何所之。君言不浮意。歸此而山。海。但。不。莫  
復。問。白。雲。昔。盡。時

相逢方一笑。相送還成泣。祖帳已傷。離。甚。城。復。愁。入  
天。寒。遠。一。淨。日。暮。長。河。急。解。纜。已。遙。望。君。備。時。日  
故。深。明。星。高。蒼。茫。遠。天。曙。槐。露。暗。不。聞。城。鴉。鳴。稍  
去。始。聞。聞。高。閣。聲。莫。辨。受。衣。處。銀。燭。已。滅。行。金。門





圖十一「行楷古人詩文冊頁」 10

第一部分

劇者若以陽之開而為  
夢之寶則其以夜類是  
反時性信為大射乘傳東  
將王河而得劇是喜曰吳  
其年大車而為劇是喜

切莫看做為之天下騷動  
大明年之若一敵國之劇  
甚以火難若家如好信多年  
少之數其為必死自來之選  
衰蓋千乘及為化家為

金之解而符離之至二以佳  
和口作一問  
多道之人若以新造之人  
而為之者其有之身記作  
王秋香何如

漢西宮宴望  
杜老舍群動朝光切不有  
年優鍾帳望樂意二  
珠履挂時相與一同行

烟自如朋曹唐暮新至  
空卜還西度  
不離西園  
江柳北時散江花定

頻地偏在布瘁一隔近  
日今春失學乞恩子居  
家信老身不知而園意  
宜別空留人

西至從人外人之家之口  
雲飛去後石壁訪時  
流海之日知何何可  
平生艱勝事可誰

多落花世難極水自疑  
新卷為影名不取相能  
批取相也  
美何居難定春歸

初鏡  
入字之音  
奔峭皆若甲新若為白  
懸空居塊處以春海

去意吐生為之及浦  
廣雲山半頂相和而  
眉柱材相和看多佳者  
二向函園

未還山中饒霜露風氣  
亦先寒田家豈不苦弗復  
辭以難心體誠已疲庶無  
異患于空濯息簷下斗

人生歸有道衣食固其端  
孰是都不營而以求自安  
開春理常業歲功聊可  
觀晨出肆微勳日入負

酒散襟願遠沮溺心干  
載乃相聞但願長如此  
躬耕非所歎  
弱年逢家正老至更長既

菽麥實所羨訖設茶甘肥  
熱如亞九飯當暑厭寒木  
歲月將欲暮如何年苦悲  
常善粥者心深恨蒙杖非

嗟來何足論徒沒空自遺  
此思望成志因家風以  
為德也之夫在若人者  
師  
生也

圖十一「行書鍾靜人猶寢雜記冊頁」 10

第一部分

靜人猶寢天為量小一星入  
月平榜宿寧老愁城下妙  
然路倚青山依舊也空見月  
人面正不妨過此歲前多少  
凡費僕也此意都是深味是而

可也如人猶知如調一夫  
性與此說若夫一白一白  
山前好何如不誰矣之者  
河清不唯日當心人以為  
中全生以多情據在人德  
知自志亦因於此如不知  
年願以時時時時也

凡字書法皆由天授  
性氣所發一氣而醉清  
視偏派催新極其意矣  
吾知手札此字能盡其

文也德其人耳  
清字者是為字之日亦現  
之也如湯字之為也

清字者是為字之日亦現  
之也如湯字之為也





辛酉天選

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

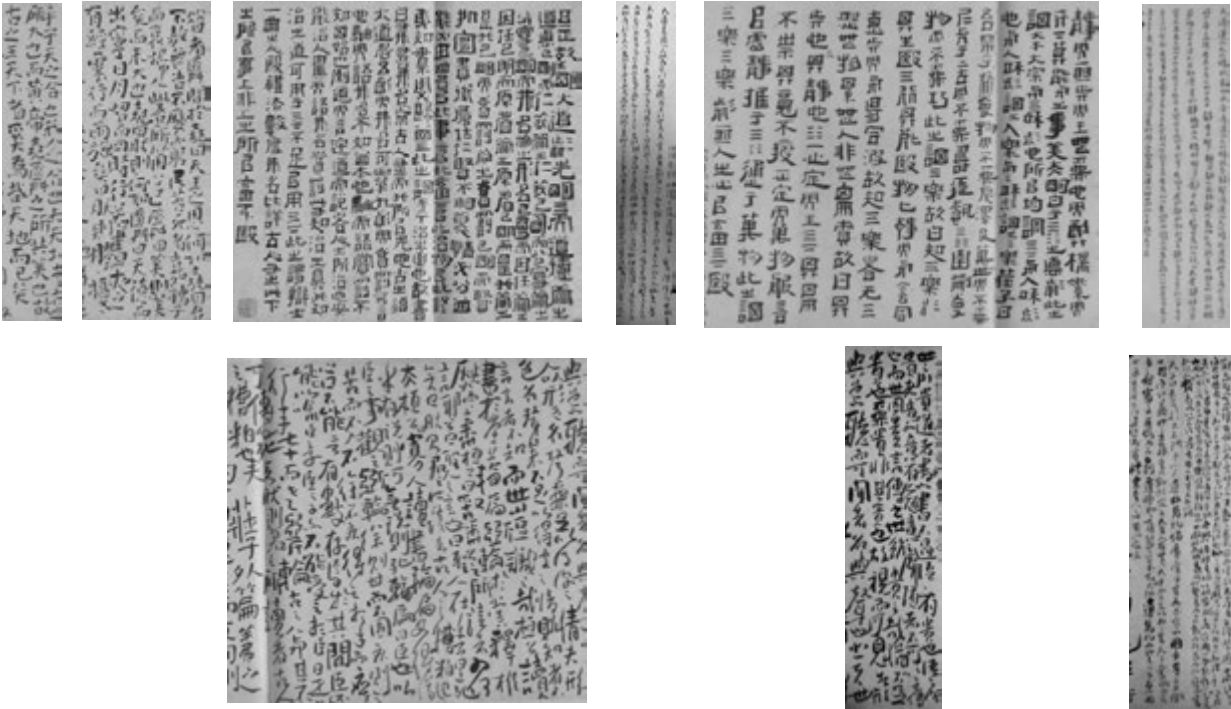
此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

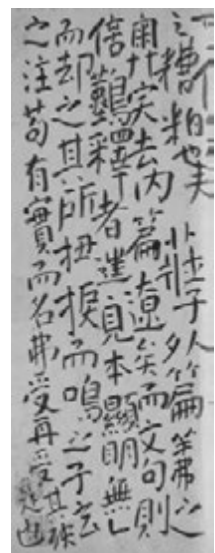
此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

此天選之經緯... 辛酉天選... 經緯...

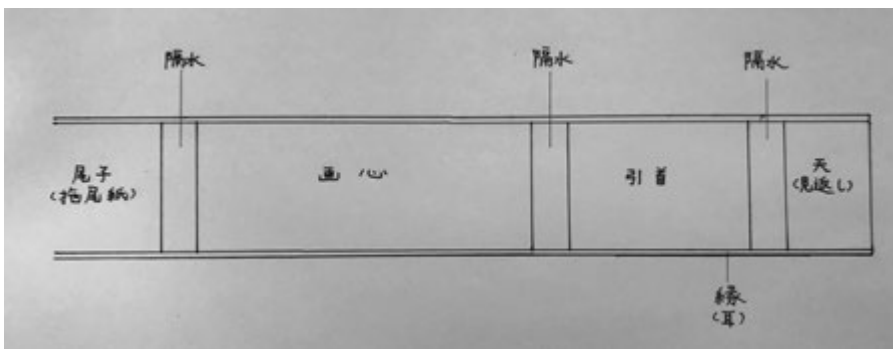
第六部分



第七部分



図十三 撞辺式の卷子



丁成東『中国装潢史の研究』を参考する



- 1 白謙慎「雑書卷冊和晚明文化生活」 『書法叢刊』 2003年第3期
- 2 白謙慎『傳山の世界』(『傳山的世界』) 163頁 三聯書店出版社 2015年9月
- 3 本年譜は、内山知也『傳山』(1994年5月・芸術新聞社)第222頁に掲載の「傳山年譜」に基づいて、李広潔『傳山書法全集』(2007年6月・山西人民出版社)所収の「傳山年譜」、魏宗禹『傳山評伝』(1995年9月・南京大学出版社)中の「傳山的生平著述」、今川鷗洞『傳山研究』(2019年4月・美術新聞社)中の「傳山の生涯」を適宜参考し編集した。
- 4 「反清復明」…清に反抗し明王朝を回復させる。
- 5 郝繼文「傳山隸書略論」 『書法』 2017年4期
- 6 魏宗禹の『傳山評伝』の中に、傳山の字号に関する考察がある。傳山は「僑」という字を号にすることに十一種類あり、これは傳山が清王朝への反対を示したものである。魏宗禹は整理した傳山の五十四個の字号の中に「村僑」という号がいり、順治十二年(1655年)、傳山が五十歳のときに書いた「山寺病中望村僑作」という詩から見ると、「村僑」も傳山の号ということに分かる。『傳山評伝』南京大学出版社 8頁 1995年9月
- 7 内山知也『傳山』 222頁-237頁 芸術新聞社 1994年5月
- 8 白謙慎の『傳山的世界』147頁に載っている考察によって、『番廬妙翰』が書かれた時期は1651年-1652年ぐらいである。楊氏が傳山に居所を提供するので、楊氏の恩に報いる作品である。つまり、交際の作品であり、明らかな政治的意図はない。
- 9 撞辺 画心(本紙)を隔水・引首・尾子の後ろに重ね継ぎ、上下0・5-10・5 倣古(古代の器物や芸術にまねて作ること)皮紙の縁(耳)をしつかりと貼り継いでから、さらに天(見返し)を継ぎ合わせる。 丁成東『中国装潢史の研究』(大東文化大学院文学研究科に提出の博士論文) 1頁 2017年3月
- 10 『傳山書法全集』(全8巻) 山西人民出版社 2007年6月
- 11 吳国豪『王鐸・傳山選粹』 洋紅印刷 2015年3月